



今月の軽井沢

榎本太麻子（撮影） 細江久美子（文）

雲場池（くもばいけ）

軽井沢の景勝地のひとつである雲場池。四季折々に違った景色を見せてくれますが、特に紅葉シーズンの水面に映り込んだ枝葉が美しく、訪れる方を魅了しています。



今月の詩

「あのとときかもしれない」(部分)

長田 弘

きみはいつおとなになったんだろう。きみはいまはおとなで、子どもじゃない。子どもじゃないけれども、きみだって、もとは一人の子どもだったのだ。

子どものころのことを、きみはよくおぼえている。水溜まり。川の光り。カゲロウの道。なわとび。老いたサクランボの木。学校の白いチョーク。はじめて乗った自転車。はじめての海。きみはみんなおぼえている。しかし、そのとき汗つぶをとばして走っていた子どものきみが、いったいいつおとなになったのか、きみはどうしてもうまくおもいだせない。

きみはある日、突然おとなになったんじゃない。気がついてみたら、きみはもうおとなになっていた。なった、じゃなくて、なっていたんだ。ふしぎだ。そこには境い目がきつとあったはずなのに、子どもからおとなになるその境い目を、きみがいつ跳び越しちゃったのか、きみはさっぱりおぼえていない。

確かにきみは、気がついてみたらもうおとなになっていた。ということは、気がついてみたらきみはもう子どもではなくなっていた、ということだ。

『深呼吸の必要』長田弘（晶文社）から

ゆあさとしお（選・文）

「きみはいつおとなになったんだろう」、私は芥川龍之介の「トロッコ」を思い出す。

主人公の少年良平はトロッコに乗ることに憧れていた。しかし、子どもには触ることも許されない。ある日、いつもとは違うメンバーの男達はトロッコを押すことも乗ることも許してくれる。トロッコに乗った良平は風を感じて有頂天になる。

だが、遠くまで行って男たちは現地泊まりだと言い、彼は一人で帰らなければならなくなる。

良平は暗い夜道を不安に耐えながら無我夢中で走り続ける。芥川は結末をこんな言葉で結んでいる。「(26歳で妻子と東京へ出て仕事に就いた良平)……塵労に疲れた彼の前には今でも……薄暗い藪や坂のある路が、細細と一すじ断続している。」

大人になるとは、自由と引き換えに不安と孤独に耐えることなのだ、と芥川は言うのだ。

長田弘（おさだ ひろし）：1939–2015

福島生まれの詩人・評論家。『われら新鮮な旅人』でデビュー。

こども食堂実践報告

長野 貴子（こども支援士）

2018年から2020年まで約3年間続いた活動の記録をざっくばらんに書いてみました。雑文ですが、最後まで読んでいただけたら幸いです。

＜長かった活動準備期間、約8ヶ月＞

2017年10月から準備開始。当初はこども食堂については白紙だった。自分たちが何のボランティア活動の一つでしょうか？集まった男女7名の話し合いがここから始まった。

それぞれが持っていた思いと問題意識は様々だった。一人は、お醤油の貸し借りができるような助け合う地域で安心して子育てをしたい人。一人は、精神障害の知識を若いうちに知ってもらい病気の早期発見早期治療を可能にしたいと考える人。また、お子さんが小さかったとき親子で休める家庭でも職場でもない第三の居場所が欲しかったから、今度は自分が第三の居場所＝サードプレースを作りたいと思う人。被虐待児を発見し救いたいと願う人。家でご飯がない子におふくろの味を提供したい人。生きにくさを抱える人に寄り添い一緒に笑顔になりたい人、など。

こうして皆に想いはあってもいざ一つのことをしようとしても、なかなか具体案は出てこなかった。が、ある時ぼそっと、「私がやるとしたら、子ども達と一緒に勉強をして、終わると、『ああお腹空いたね。さあ、じゃ、おむすびとお味噌汁をいただこっか。』てなるのがいいかな。」と人に寄り添いたい者がつぶやくと、「それ、できるわよ。」とおふくろの味を提供したい人が。そしてサードプレースを作りたい人が「じゃ名前はオムスビカフェ（仮称）！」と即、活動名が決まり、明快に団体名も活動名と同じとなった。全員が都合のつく日は土曜日で、また、提供するのがおむすびとお味噌汁というシンプルな食事のせいも、流れで、いつの間にか『土曜の朝にしっかり朝ごはんを食べよう！』でまとまっていた。これには、休日の朝に多忙のお母さんが家事から解放されることをねらっていたし、家にご飯がない子への支援、また、被虐待児を探す糸口にしたいとも考えていたし、会場に精神障害のパンフレットを置くことも視野に入れていた。

＜場所探し＞

内容が決まって次は、場所探しに移った。社会福祉協議会のお世話で3ヶ所の候補地を頂き、この中からご縁で、福祉活動が少ない地区で特に歓迎され、この地区の農家の方が責任者を務める無料の公共施設を利用させていただくことと決めた（この時点で2018年3月だった）。この農家からは活動中、農作物を毎回、開催前日に沢山分けていただき、我々が食事を支度するのに野菜に困ったことは一度もなかった。

また、これまで立ち上げ準備は、自分の仕事を持っている全員の仲間が時間をやりくりして月に1～2回程度土曜日午前中を使って重ねてきたわけだが、活動の軸と決まったおむすびと一汁一菜という簡素な食事を提供するとはいえ、朝ごはんを用意するためには未明から動かなければならないことによりやく全員が気づいた。自分達が継続してやっていけることをやらなければならず、そのため時間をずらし、ランチタイム開催に変更した。

多世代交流を図れるような場づくりを行うと同時に地区のニーズに応え、地区の方と一緒にさりげないサードプレースを作り育てていくことを目標とした。子どもを含む地域住民が対象者であるが、どなたにもいらしてほしいと謳った。

＜重要なこと…財政面＞

初めに決めておくべき参加費用は、経費がどのくらいかかるか見込めなかった為なかなか決まらなかった。そこで社協さんに助成金申請をするなど少額であるものの確実に固定収入を得られるようにし、おにぎり代として中学生以下の子どもは無料、大人は100円とした。また、金策で、子ども食堂を始めたい人が集まる講座等で活動紹介を求められれば、断らずにレジュメを用意して出向

き話をし相談にも乗り、その報酬を得たり、そういった努力もした(その機会は2回あった)。また、我々の活動を外部に臆することなく広報し続けると、寄付は個人の方から金一封や、頂けた食材は、農家の方からのお野菜の他に、ふるさと納税の返礼品の食品や、米、海苔、味噌、顆粒出汁、自家製緑茶、お庭に生った果物、など様々。フードバンクから提供を受けることもあった。このような多くの方々のお力添えを得ながら、赤字を出さずコツコツ貯めることを心掛け、食事提供以外に何かを仕掛けていく資金を作ろうとしていた。

仕掛けていく何かの案には、大きなものに、みんなで習う手話教室、クリスマス会などがあった。が、貯蓄のスピードがゆっくりだったこともあり、活動期間中にこれらの実現には至らなかった。

<活動スタート>

毎月。第2土曜 11時開店 14時閉店とした。当日実働は早朝から夕方まで・

第1回トライアルオープン

2018年6月9日(土)。大人25名・子ども10名参加。予約制ではなかったもので、どれだけの支度をすればいいのか読めなかったことがとてもプレッシャーだった。蓋を開けてみると、想定を越えなかった。お味噌汁は徐々に減ってくると、具沢山の鍋にコンロの上でお湯を足したり味噌を加えたりして増量することが出来たのが幸いし、子ども達からのお代わりの要望にもちゃんと応えることができた。

第2回

7月7日(土)。七夕で、同会場に七夕の工作をするイベントが他団体であり、その工作作業の後、参加者の皆さんにランチを提供した。大人22名、子ども5名、他団体含むスタッフ25名、合計52名参加。

使った野菜は採り立ての新鮮でありながら、形が売りに出しづらい出来のものが中心だったので、通常よりも包丁をたくさん使った。この回、具沢山味噌汁の具材は玉ねぎとジャガイモで、大量の玉ねぎを薄切りしてジャガイモの皮を剥きスライスするのに前夜、未明までかかった。この回は我々は食事を提供しただけでよく、番外編の活動だったといえる。

<もうひとつのプレッシャー>

おむすびとお味噌汁と一菜をどれだけ支度すれば過不足ないか。これともうひとつ私には大きなプレッシャーがあった。

それは、私達の子ども食堂は、町の食堂でもなく喫茶店でもなく、お酒を提供するところでもなかったことだ。それなのに、初対面の方が何かを求めてみえる。その方々にどんなお声掛けをしていけばいいんだろう、ということだった。どんな心配りと配慮をすれば、居心地の良い場づくりができるのだろうか？私には出来る自信が全くなかった。

第3回

8月11日。前回の七夕の工作の続きをイメージして来た方もおられて、食べ終わると手持無沙汰で、早々にお帰りになる方も。私達は何を提供できるだろうか。終わって、ない知恵を絞った。大人18名、子ども2名参加。

第4回

9月8日。お手玉作りの材料と折り紙を用意。テーブルに広げてあった折り紙でお子さんが遊びたくなって、そのテーブルにやって来ると、その場にいた初対面のお年寄りが折り方を教える場面も見られた。大人15名、子ども9名参加。

以降、座って会話が生まれるようなテーブルの配置を工夫したり、絵本も用意し、自由に見られるように、読み聞かせもいつでもできるようにした。ボードゲームも用意した。辞書数冊と世界地図帳も用意し、いつでも宿題の手伝いと学習支援ができるようにしていた。

ある時は、置いてある辞書に気付いた子が「あっ辞書があるう！」と感激してページをしきりに

捲っていた。が、土曜の昼に勉強したがる子は一人もいなかった。

食堂を数回重ねると、見知らぬ人同士が大テーブルを囲むことに私がだんだん慣れていき、リラックスして話しかけられるようになっていった。常連さんと初対面の人たちをなんとなくつなげていくお声掛けも出来るようになっていった。勧めた訳ではないが、子どもたちはいつも親御さんと一緒に来たので、挨拶をしたあとはまず親御さんにお声掛けしご案内した。

<思い出の一部のご紹介>

1) お母さんとその二人のお子さんと話しをするうちに、その親子は野菜を好まず普段ほとんど召し上がっていないことがわかった。アレルギーではないとのことでお膳をお出しした。その回はたまたま夏の特別メニューでカレーだったからか、具は野菜だけにもかかわらずペロリと残さず食べてくれた。私はほっと胸をなでおろした。

2) マイ箸とマイ茶碗の持参を推奨したところ、うどんが入るような大きな丼を持って見えた方もいた。おむすびは中味の具が違うからか、4個も5個もほおぼる方もいた(これはいずれも大人)。回を重ねて、我々がおむすびは不足しないように手渡し方を工夫したり、結ぶ大きさを工夫したりしたけれど、今思えば、求められ喜ばれていたことがありがたい限りだったと思い出される。

3) 中学2年生の男の子と学校の勉強を話題にした時は、その子はとにかく点数を取るための手っ取り早い答えだけを求めていることが私にもわかった。隣席する彼のお母さんは、それを効率よく得られる塾を複数探しているとのことだった。自分で試行錯誤し踏むプロセスこそが血肉になる旨を私が言及した時、親子共にどこか知らない外国語を聴くような表情をされていた。

4) お味噌汁をフーフーして食事がなかなか進まない小学生がいた。お母さんが「この子は猫舌で熱いのが飲めないんです。」とおっしゃったので、「熱いもので食道や胃が火傷しないように、入口でシャットアウトして、ちゃんと自分の体を守れているんですね。」と返すと「A君、猫舌のこと、初めて肯定されたね。今まで猫舌を肯定してくれた人、いなかったもんね。」と、お母さん。この後このA君は食後しばらくして、作業している私の前に立ち、次から次へと懸命に自分のことを私に話し始めた。私は手を止めてその声に耳を傾けた。が、これには失敗があった。A君の求めたことは、話すことすべてに猫舌の話の時と同じように私が具体的に答えることだったようだったのだ。「うんうん、そうなんだね。」としかその時私は肯定できなかったのもので、A君は満たされなかったようで悲しそうな表情を見せた。滞在中にフォローが出来なかった。継続的に会うことのない環境での対話は一回勝負。私はむずかしさを痛感した。

<食中毒の心配>

会場には冷蔵庫がなかった。朝10時半頃出来上がったおかずは、室内にて室温保存となり、終わって残りを持ち帰った夕方には味がほぼ失われていた。これが傷むということなのか、と味覚で体感した。保健所の衛生研修を受けたりと食中毒については注意を払っていたが、私達が一汁一菜に精肉や鮮魚を使わなかったことが結果的に、最大の食中毒対策になっていた。

<集まる人々>

いろんな方が通ってくださった。例えば…、隣接する公園でグランドゴルフを終えたご高齢の仲間。面白い歌を披露するおじいさん。チラシを見て遠くのお友達に声をかけ集まって下さった成人女子友。お母さんが食事の支度をせずすむからと息子さんと。土曜はお父さんが子ども担当だそうでお子さん二人を自転車に乗せて。ママ友に溶け込むのが苦手なお母さんと一人娘。パパママ以外の人に初めて会う赤ちゃんを両親が連れて来てくれた時には一気に場が湧き和んだ。

<おわりに>

このように様々な人が見えると、現代社会には程よい風通しと寛容さが必要で、暮らしの中に、どんな人にも選択できるサードプレイスは一人に対して複数あったほうが人は生きやすくなる、と

自然と理解できる。今、町には銭湯がなくなっていき惜しまれているが、子ども食堂は令和の銭湯のような存在になれるような期待を私は持っている。町のそこそこに個性溢れる食堂がたくさん在れば、血縁によらない団欒が生まれる。最近求められ始めた社会における「多様性」とはこういうことではないか。もちろん、子ども食堂は、子どもが親と先生以外の大人に出逢える貴重な場にもなり得ると思う。そしていつか孤立した家族や個人、虐待を受けている子どもにつながる力をもち得てほしいと私は願っている。

私達の子ども食堂、この多世代交流の居場所は、新型肺炎が猛威を奮いだした 2020 年 3 月下旬までの 2 年弱、毎月、台風直撃のタイミングを除けば、雪が降っても一回も休まず実施することができた（通算 21 回）。新型肺炎の流行により 2020 年 4 月から 8 月まで活動を休止。9 月から 12 月まで感染を懸念し形を変え、食事提供のない集える場づくりを同じ日時場所にて実施。この年の暮れに、担い手不足のため団体を解散した。

体感からの学び 「ビビっと！足利いろどり物語」 ～故郷の歴史語り・実践報告～

成澤 布美子（演劇表現活動家）

1 はじめに

故郷・栃木県足利市で表現教育を始めたのは、父の他界がきっかけでした。足利をこよなく愛し、郷土史家として、歴史小説家として、文字で後世に伝えようとした父の志を受け継ぎ、表現教育で故郷の子ども達の役に立てれば、との気持ちからでした。幸い、妹が小学校教諭だったので、まずは以前、寄稿させていただいたドラマ教育法『アプライド・ドラマ』のワークショップを小学校の総合学習の時間に！また春・夏・冬休み中、生涯学習センターにて、年三回開催することからのスタートでした。この活動を始めた頃、父の歴史仲間が訪ねてきました。「子ども達に故郷の歴史を語り継いでください。」と。歴史と一言で言われても（何をどう語ったら、子ども達が故郷に興味を持ってくれるのか）と悩みました。確かに、表現教育は「体感」と「体験」が合わさってこそ、心と身体で学ぶことができます。「歴史語り、体感」と「アプライド・ドラマ、体験」、両輪として取り組んでみる価値はあるなど。まずは何を題材とするか、そこから思案することとなりました。



2 物語からの体感とは？

物語と現在を結ぶ懸け橋が、題材です。足利はかつて「織物の町」と言われました。歴史は古く、奈良時代から始まり、明治の中頃には世界各国に輸出され、大正から昭和初期には「銘仙」で大ブームとなった歴史を知り、今にも通じるビビットな色・柄が特徴の足利銘仙は、子ども達に興味を抱かせるであろうと予感しました。時は「近代史」、「銘仙」を題材と決めた後、物語を掘り起こすには取材が必要です。歴史には人が必ず関わっていて、そこにドラマがあります。自分の足で歴史を育んだ様々な場所に出向き、人と出会う。そこに縁が生まれて物語の枠組みが決まっていきます。町の歴史には欠かせない市政、近代文化遺産、近代教育、繊維産業などなど…興味はあちらこちらへ向かいますが、物語の核は「子ども達に伝えるべきこと」そこから郷土愛が育まれますようにと、脚本執筆を始めました。

大事にすべき事は、三つ。其の一、子ども達が感情移入できる登場人物が必要。其の二、ただ歴史を語るのではなくエンターテインメント性も重視する。其の三、子ども達が何に興味を示すかは個人差があるので多様な情報をさりげなく伝える。そこで人形劇仕立ての語り芝居にすることにしました。

其の一は、九十一歳の曾おばあさんと六歳の曾孫を軸に会話劇とし、子ども達が「着物は窮屈だ」と言っている曾孫の心に寄り添い、曾おばあさんから銘仙等の歴史を聞いた後、銘仙に興味を持ち着たくなってくる過程を描きました。脇役として蚕と繭の妖怪、歴史の生き証人のカモをペープサートで、単調になりがちな一人語りに彩を添える工夫をしました。



其の二は、人形・ペープサートに加え、カモが歴史を語る時は講談の手法を使い、劇中に三味線・唄・鳴り物で足利古謡を奏で、伝統芸能も紹介しました。ラストは銘仙着物を舞台セットとして使い、生徒から二名選んで銘仙の着付けを披露、そして昔は子供からご年配まで市民全員が歌えた「足利音頭」を子ども達と歌い、終演します。

其の三には、メインテーマは「織物のまち、

足利」であります。文化遺産である建物、織物富豪たちの地域貢献、戦争との関わり、終戦後市政を立て直した人物たち、作者として伝えたいメッセージもさりげなく盛り込み、総合芸術である演劇から何かを感じ、何かに興味を持ち、体感から何か学び取ってくれればよいと願いを込めました。

3 地域自治体、地域住民との関わり

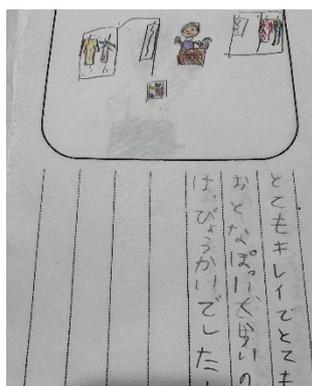
今回の発案者は、父が立ち上げた『故郷の歴史で町興しを』をスローガンにした市民団体「リビルド会」会員の方でした。商工会議所、織物伝承館、銘仙コレクター、足利古謡演奏者など、取材をしていくうちに御縁をいただいた方々は全て「足利の未来を担う子ども達のためならば！」と快く協力を惜しみませんでした。戦後、足利市長を二十年も務め、織物産業から国政、市政へと転身した二代目木村浅七氏の市の文化財邸宅を取材した折、隣に住むおばあさんにお話しを聞き、ストーリーテラーとした登場人物『ビビットおばあちゃん』のモデルになってもらいました。御縁は必然だと思われました。

このコロナ禍、演劇鑑賞教室が少なくなっている昨今、全校生徒への授業として表現教育の時間を作ってくださった[足利市立青葉小学校](#)の宮澤和巳校長談。「デジタルな世の中なので、アナログな舞台表現で自分の内側からイメージすることを大事にして欲しい。一場面でも、一言でも心に残ってくれればいい。」落語とラジオがお好きな校長先生だからこそと、有難く思いました。初演の木村浅七邸での試演会を含め、今年度は2校の小学校、学童、来年1月には公民館での公演を予定しています。来年度も人から人へと繋がりますように！

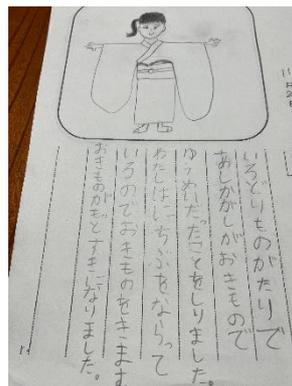
4 体感と体験から学ぶ表現教育の必要性

フリーアナウンサーとして20年務めた経験として、放送は一方通行であり、お相手の反応がわかりません。イベントの司会は、その場の空気感で会場に居る方々の気持ちが汲み取れます。先生方もオンライン授業で体験されたことと思いますが、対面だからこそ、お互いに感じ取れる事があるのではないのでしょうか。学校で友達や先生方と良質な舞台表現を一緒に観る事。ドラマ教育で物語を疑似体験する事。どちらも大切だと私は思っています。

「ビビット！足利いろどり物語」に込めたメッセージ。《人は間違えることも失敗することもあるけれど、そこから学び、人生に活かすことが出来る》 《足利の織物産業は衰退したけれど、織物技術を応用して進歩させた企業もある。人生には応用力が大切》アプライド・ドラマを推進する所以です。物語には作者のメッセージが必ずあります。子ども達の心に、一人でも届いてくれたらいいなと、これからも真摯に活動を続けてまいります。



とてもキレイで、とてもおとなっぽいやいぐらのはっぴょうかいでした。



いろどりものがたりで、あしかがしがおきものでもうめいだったことをしりました。わたしはにちぶをならっているのでおきものをきます。おきものがもつとすきになりました。

小林一茶「父ありて明ぼの見たし青田原」を読む

市原 潤（元長野県立高校長）

小林一茶は宝暦 13(1763)年、信濃国(長野県)の北部、新潟県塚の柏原村に、父弥五兵衛、母くこの長子として生まれた。代々の名主家に伝えられる系図によれば、小林弥五兵衛は、文禄元年、柏原の隣村芋川村から柏原村川久保地区にやってきた開拓農民小林太郎左衛門から数えて七代目、一茶は八代目の子孫だった¹。母くには柏原村仁之倉の村役人宮沢家の出だった。芋川村は、柏原村の南東に連なる山地を南に下る谷間の山村だが、上杉と武田の二大勢力による戦国時代の争乱が終わり、柏原村には近隣より多くの農民が入って新田開発が盛んに行われた。この地の新田開発は他に抜きんでて多かった。慶長年間、元禄 15 年、天保 5 年の検地帳石高を比較すると、信濃国全体ではそれぞれ 1.5 倍、1.9 倍に達するが、柏原を含めた信濃町地区では 4.9 倍、9.2 倍に達している²。

戦国期から江戸時代初期に柏原村には四つの新田村がつくられた。新田名と開発年、元禄 15(1702)年と文政 13(1830)年の石高は次の通りである³。

仁之倉	慶安 2(1647)年	229,207	425,678(石)
大久保	明暦 2(1656)年	105,263	105,263
赤渋	寛文 2(1662)年	154,889	154,889
熊倉	寛文 5(1665)年	65,163	95,467

(大久保・赤渋の数値は前回報告分をそのまま掲載したらしい。文政 13 年村明細帳) (原注)

新田村は、黒姫・飯綱山の東の平坦地に位置している。

上図は国土地理院による信濃町の陰影起伏図である。下図は四つの新田村、の位置を示している。北国街道の西側、現在のしなの鉄道を挟んで、北から赤渋、熊倉、旧来の柏原、西に仁之倉、街道の東側に大久保がある。信濃町は西に黒姫山と飯綱山が聳え、山頂から続くなだらかな斜面が東に向かって開かれている土地だった。図中の矢印は現在の役場所在地を示すが、一茶の生家も近い。北国街道が南北に通る、右上の平面にみえるところが野尻湖、越後との県境は比較的平坦な地形であり、そのために豪雪の地であって、信濃町の南に位置する山間部に比べれば、雪の深さは比べるまでもなく深いのだが、農地の広さは山間部の比ではなかった。柏原村の発展に開拓農民は、土地の開発、生産高の拡大、村政の発展等に大きな役割を果たした。

森や林を切り開き、田をつくる、当然だが、水田には水路が必要だ。一枚ごとの田の水量を調節できるような仕組みも作られねばならない。大久保、赤渋、熊倉、仁之倉の開拓についての記録は、



↑ 信濃町の陰影起伏図(国土地理院)黒姫山と飯綱山の東側のなだらかな斜面と平地に新田が開かれた。中央の矢印は現在の役場の位置。その上の平面は野尻湖。

↓ 現在の信濃町の中心部 自動車道、新幹線、国道、しなの鉄道が南北にほぼ並行している。柏原新田の大久保、赤渋、熊倉、二ノ倉。



1 尾澤善雄『一茶家系考』(岩手大學學藝学部研究年報第二巻 pp84-114 1951年) 名主家に伝えられた系図とは別に、柏原問屋本陣の中村六座衛門に伝えられる系図もあり、それによれば、一茶の先祖は「小林惣兵衛、本国越後、長森村之人又春日村近所の人とも云、元和 2 年 4 月 15 日来る」とあり、名主家の系図と比較して、どちらが事実か明確に示す資料はない。が、両史料その他諸資料を比較考量し、一茶の先祖は、柏原開拓農民であったことは事実であろうという。

2 『信濃町誌』p 140 昭和 43 年 上水内郡信濃町 信濃町誌編纂委員会

3 同上 p 142

土地の人々の記憶の中であって、それは世代ごとに更新され、歴史として刻まれていったに違いない。幾世代にもわたる記憶と記録がどのように継承されていったのか、必ずしも全てが詳らかではないが、開拓民の心や行動の深層に少しずつ刻まれていったに違いない。一茶の母も新田村仁之倉の出身であり、最初の妻きくの出身の赤川村⁴も開拓村だった。後妻の雪女とは3か月足らずの生活であったが一茶とは全く合わなかった。彼女は飯山藩士の娘だった。その後の妻やをは越後二股村の出身だった。娘やたが生まれ一茶家を継いだ。

一茶の先祖の暮らしは順調に発展し、街道沿いに間口9間 奥行23間の一軒家を構え、農業と宿駅の用のために一匹の馬を飼うなど暮らしも安定し、落ち着いた暮らしが出来ようになっていった。先の系図によれば、夭折した子もみえるが、新たに分家を設けることもみえ、一族は順調な暮らしを営んだようにみえる。小林家の家産は村の中の上のクラスだったという⁵。

3歳で母くにを亡くした一茶は、祖母のかなに育てられた。8歳のとき父の後添え、一茶の継母さつが来たが、折り合いが悪く、義弟仙六の誕生後は、なお一層、継母さつは一茶には冷たい仕打ちをしたようであった。父も様子を知ってはいたが、如何ともなし難かった⁶。

14歳の時、何かにつけて一茶をかばってやってきた祖母かなが66歳で亡くなった。父もこれ以上は見るに見かねて、翌年15歳の一茶を江戸に奉公にだした。江戸で頼った先については、種々の説や伝承があるが不明である。

俳諧の道に踏み入った一茶は、やがて、その世界で身を立てられるようになった。

天明7年25歳の時、長野県南佐久郡佐久町上海瀬の新海米翁の米寿記念集『真砂古』に、渭浜庵執筆一茶として「是からも未だ幾かへりまつの花」が載った。執筆は句会の座の書記の役柄、江戸に出た一茶は粒粒辛苦の末に俳諧の道を見出していたのだった。渭浜庵は、江戸浜町の幕府書院番で当時隆盛を極めた葛飾派の溝口素丸の庵号、一茶は素丸の世話になって俳諧の道を歩み始めていたのだった。

一茶が柏原に姿を現したのは、それから3年後、寛政3(1791)年の夏の初めだった。この年の3月末、江戸を立った一茶は、下総の俳人仲間を訪ね歩いた後、中山道を信州に向かい、4月18日に柏原に帰った。彼は29歳になっていた。この旅について、後年、一茶は『寛政三年紀行』としてまとめている。父と再会し、自身の西国への俳諧修行の旅の計画を話すと、父は西本願寺への代参を頼んだ。父は熱心な門徒だった。

いったん江戸に戻った一茶は、翌寛政4年西国に旅立った。一茶を自称したのはこの時からだった⁷。九州、四国をめぐる旅は寛政10年まで続いたが、この年の秋、大和の長谷寺を訪れたのち、木曾路を経て7月末に柏原に寄って、ようやく江戸に戻った。(西原文虎『一茶翁終焉記』⁸より)

江戸での活動をようやく再開した一茶は、俳人番付に「前頭江戸一茶」と名前が載るようになり、江戸やその近在の門人を指導する日々を過ごしていたが、郷里の義弟から、書信が届くようになった。一茶の発来信控えであった『急通記』には、義弟の仙六と思われる人物からの来信や送金が記録されている⁹。享和1(1801)年、3月下旬に帰郷した一茶を待ちわびたように、父は家産の折半を言い残して5月21日に他界した。65歳だった。一茶は遺言の実施を迫ったが、義母と仙六は同意せず、本家や村役人を巻き込んでの交渉が始められることとなった。

一茶は、父の看病からその看取りと葬儀に終わった帰郷の一部始終を、『父の終焉日記』として書き残し、その最後に自身の句を記している。

父ありて明ぼの見たし青田原

4 赤川村は現在の信濃町のうち旧野尻村の新田だった。『信濃町誌』125p

5 『信濃町誌』p298-299

6 『終焉日記』のなかに、一茶は父の言葉として次のように書いている。「ふとおもひけるやうは、一所にありなば、いつまでもかくありなん、一度古郷はなしたらば、…としはも行ぬ瘦骨に荒奉公させ、つれなき親とも思ひつらめ。…」

7 寛政4年西国への出立に際して一茶は、「剃捨て花見の真似やひのき笠」「春立や弥太郎改(め)一茶坊」の句を詠んでいる。

8 西原文虎は、信州高山村の油商、一茶の門人。一茶後半生の20年の知己であるが、他には記録のない寛政10年の一茶の帰郷について書いている。

9 矢羽勝幸『一茶大事典』(1993年大修館書店) p23

この帰郷は、春から夏の農作業の時期と重なっていた。継母や義弟の仙六は、父の死を期待している素振りもあからさまで、病む父の看病を一茶に任せた。とくに継母さつの一茶への態度や父の扱いは邪険で、一茶は父や母、祖母と暮らした温かく穏やかな日々を思い出したに違いない。

句の意味は平明だが、ここに込められた感情には深いものがある。それは体験したものでなければ分からないものかもしれない。体験したことがなければ、「青田」は初夏の一つの光景・景色に過ぎない。一茶の時代には「青田」は季題としてとりあげられ、「類題集」(歳時記)の名で多数の句が掲載される書も出版されていた。

芭蕉や蕪村をはじめ多数の俳人が青田の句を詠んでいる。殆どが「青田」であって、「青田原」の句は殆ど見られない。眼前に広がる一面の青田に何をとりあわせるか、その妙を誇るような句が多数つくられている。そこではむしろ青田はその背景にすぎない。青田という背景こそが前景を一層際立たせる。背景の青田によってこそ前景の主題はより一層際立つものになる。

楽しさや青田に涼む水の音　　芭蕉
塵塚の髑髏にあける青田哉　　蕪村
炎天や青田に動く人の影　　子規
夕風の見えてねぢれる青田哉　　〃

芭蕉は西行の「道のべに清水流るる柳陰しばしとてこそ立ちどまりつれ」を踏まえて、「田一枚植ゑて立ち去る柳かな」と詠み、さらに「清水流るる音」を踏まえてこの句を詠んだ。

画家でもあった蕪村は、色彩感覚に優れていた。一面の青のなかに浮かび出るような髑髏を置いている。夜明けの光が差し込み、青田の緑がきらめき始める光景のなかの純白の髑髏。

子規は、炎天のなか青田で働く人の姿を見ている。農業がすべて肉体労働であった時代、青田の中に踏み入っての労働といえば田の草取りだが、田の草は抜くのではなく泥の中に押し込むのだと信州のある農書は教えている。この青田で動く人は草取りだろうか。これは地方によってやり方が違うのだろうか。数十センチに成長した稲は風に吹かれてそよぐ、その動きは風の速さや向きによって波のように伝わっていく。目には見えない風の道やその力も方向も、青田の稲の動きにみえる。子規の「写生」は秀抜である。

一茶は青田の句を 60 句あまりつくっている、青田原は眼前に広がる一面の田を指しているのに対して、青田は目の前の特定の田を指している。

箸持てぢつと見渡る青田哉　与播雑詠　寛政中
木がくれに母のほまちの青田哉　文化句帖　文化 1
見直せば〜人の青田哉　文化句帖　文化 4
しんとして青田も見ゆる簾哉　七番日記　文化 9

一茶の「青田原」の句は次の 7 句

憎るゝ稗は穂に出て青田原　寛政句帖　寛政 6
青田原箸とりながら見たりけり　与播雑詠　寛政中
父ありて明ぼの見たし青田原　終焉日記　享和 1
りん〜と凧上りけり青田原　七番日記　文化 13
けふからは乾さるゝ番ぞ青田原　八番日記　文政 4.9
刀禰の帆が寝ても見ゆるぞ青田原　文政句帖　文政 7
軒下も人のもの也青田原　文政九十句写　文政 10

稗と稲の苗はよく似ているので、田の草取りには注意が必要だが、穂が出てしまうのは管理の不足だろう。寛政 6 年夏、一茶は中国地方にいた。

9月には田の水が抜かれ、いよいよ実りの秋を迎える。

文政10年閏6月、柏原は大火に見舞われ、一茶の家も類焼した。焼け残った土蔵に仮住まいし、その年の盆は湯田中で過ごし、その後は門人宅に世話になった。11月初旬ころ仮住まいの土蔵に戻り、19日に生涯を閉じた。特に辞世の句¹⁰は残さなかった一茶だが、最後の句が青田原だったのは象徴的だ。知人宅に仮寓中の一茶にはその軒下も自分のものではなかった。しかし、眼前に広がる青田原に見入りながら、自らの「青田原」に思いを馳せていたにちがいない。開拓農民の末裔一茶の句だった。

10「やけ土のほかりほかりや蚕さはぐ」と「鹽から 鹽へうつる ちんぷんかん」が辞世の句と世上云われることもあるが、一茶がそういったわけではない。

会員談話室

自己紹介

○ 清水 彩子（武蔵村山市議会議員）

皆様初めまして。東京都在住の清水彩子と申します。

もう20年程前の話になりますが、私は保育の学校を卒業後、母子生活支援施設、児童養護施設に就職しました。コミュニケーションが難しい子も多く、叩いたり困らせたりする事で気を引こうとする子も多く、人間としても保育士としてもまだまだ未熟だった私には指導が難しい上に、突然大家族のお母さん同様の家事、慣れない夜勤のある勤務体制、こどもたち一人一人の生い立ちや虐待の傷痕に対しても上手く受け止められず辛くなり、体調を崩し辞めてしまいました。

その後結婚し、三人のこどもが生まれましたが、息子に発達障がいがあり、子育てひろばに行っても、他の子を押し倒してしまったり、奇声を上げるため、周囲に謝ってばかりで居場所のなさを感じました。

そうした経験から、障がいがある子もない子も遊べる場をつくりたいと考え、NPO 法人の代表理事となり、親子のひろばを運営して参りました。

現在は議員として、保育士の頃の経験、子育ての経験等を生かし活動しています。今でも施設のこどもたちの心身の健康、環境が気になります。令和5年4月には、こども基本法の施行、こども家庭庁の創設が予定されているため、こどもたちにとって良い環境が整うことを願っています。全てのこどもたちが自分らしさを大切に、充実した人生を歩めるよう、社会の一員として努力していきたいです。皆様どうぞよろしくお願い致します。

○ 鈴木 勲 (大学教員)

今年度から「日本子ども支援学会」に入会させて頂きました鈴木勲と申します。4月から北海道内の大学で教員をしています。私が勤務している道北地域は、11月下旬から毎日のように雪が降り、気温は氷点下30度にまで下がることのある極寒の地ですが、大学の近くには、良質な雪質(絹のようにきめ細かな雪)のスキー場もあり、ウィンタースポーツを楽しむことができます。私はまだ見たことはありませんが、条件が揃えばダイヤモンドダスト等の特別な景色を見ることができそうです。私も研究の合間に時間を見つけて、自然豊かなこの地域の生活を楽しまたいと考えています。まずは、30年ぶりにスキーを再開しようかなと思っています。

さて、私は現在、児童相談所や子ども虐待の対応にあたる専門職の人材育成に関する調査研究を継続して行っています。そこでは、子ども虐待等により、一時保護された子どもの支援のあり方等も研究の対象としています。適切な子ども支援は、子どもの最善の利益の保障に繋がると考えているからです。学会や各種活動をとおしまして、是非、会員の皆様方と学びを深めて行ければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

近況報告

○ 榎本 太麻子 (二期会オペラ歌手)

10月28日から2泊で、私達夫婦は、軽井沢に行って参りました。

東京成徳大学の講師の勤務は今年ちょうど30年目となり、初めて東京成徳大学文化祭のお休みを利用しての小旅行となりました。

11年前になりますでしょうか、深谷昌志先生、和子先生のお計らいで、大賀ホールにて、『親と子の緑のコンサート』が開催された事は、とても懐かしく感じております。その際には、軽井沢在住でいらっしやる細江先生ご夫妻に、大変にお世話になったのです。それで、今回、11年ぶりにお尋ねしました。

軽井沢滞在中は、お天気にも恵まれて、車の無い私どもは、ひたすら電動の貸自転車を利用して、紅葉を巡り満喫しました。温泉もとても良い温泉でした。

雲場池の写真のコメントは、細江先生にお任せさせていただきます。今までも、細江先生の軽井沢の通信は素敵で、私の楽しみになっております。

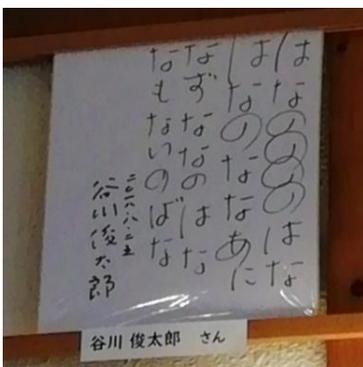
軽井沢駅前の老舗の小さいお蕎麦屋さんに行きましたら、芸能人のサイン、グルメ番組の大御所のサイン等、ところ狭しと飾ってありましたが、そして、思いがけなくそこに、谷川俊太郎のサイン色紙もありました。とても素敵です。全部ひらがなで書いてあります。

はなのの ののはな はなのななあに なずな なのはな なもない のばな

わかりやすく空欄を入れて書きましたが、谷川俊太郎の自筆は、続けて書いてあり、形も面白いです。サインだけでなく、ユーモアをもって表現者していつでもこんな風に描ける谷川俊太郎は、やはり大尊敬です。



細江久美子さんのお店(中軽井沢駅前、ア・ラ・ガール)の前で
(左)榎本太麻子会員(右)細江久美子会員



谷川 俊太郎 さん

句会 むさしの

○冬北斗遠流の島の楸邨碑

安田 勝彦

行く秋や二部合唱の山の唄

ミシン踏む家庭科室の小六月

立冬まじかの10月末、後鳥羽院遷幸800年記念の俳句大会に参加するため島根県の隠岐の島に行きました。後鳥羽上皇が承久の乱に敗れ流された島でもあり俳人加藤楸邨氏がこの島で開眼をした島でもあります。長い歴史の変遷とこの島に流された人の思いを感じながら島めぐりをしてきました。後鳥羽院の歌は百人一首の「人もをし人も恨めしあぢきなく世を思ふゆゑにもの思ふみは」。加藤楸邨碑は「隠岐やいま木の芽をかこむ怒涛かな」。

○新聞に一行もなし憂国忌

市原 潤

青空に柿ひとつある師走かな

ふと気づくと、ああそうだな、そうだったな、と気づいて、……………。

○秋深しテレビは空襲警報（11月3日Jアラート）

上島 博

この星の夕焼け映し紅い月（11月8日皆既月食）

入選の知らせ無いまま十二月

童話賞に毎年応募しています。6月には自信満々で原稿を送ります。発表の10月になると、郵便物を楽しみに待つ毎日ですが、それらしい知らせは来ません。審査員の感覚とは合わないのだと、独り合点して秋が終わります。本当のことを言えば、全国から何万人ものつわものが応募するのだから、入選なぞするはずはないのですが……………。

編集後記

師走も半ばになってしまいましたが、「風の便り」12月号をお届けします。

子ども食堂の実践、皆さんのエネルギーに感服いたしました。失敗談も含めて、ありのままの記録で、人々の動きが目に見えよう。各地で展開されている子ども食堂実践の、1つの貴重な事例になると思いました。

「いろどり物語」の実践からは、ねらいをきちんと持って構想し工夫することの大切さを学ぶことができました。表現活動のプロとしての感覚が、子どもたちの食いつきを生んだのだと思います。

一茶の読み解き、いつも楽しく読ませていただいております。一茶の悲しさと情の深さを知ることができました。

雲場池の辺りは、もう枯れ葉が舞っているのでしょうか。何の用事も観光もなしに、軽井沢に滞在して、ぶらぶらと散歩をすればいいだろうなあと思います。

今号も、多彩なお原稿を寄せてくださり、ありがとうございました。日本子ども支援学会の人のつながりは、視野を広げてくれます。

深谷和子先生がご体調をくずされたので、今号は私が後記を書きました。でも、もう復調されていますので、ご安心ください。お互い、健康第一で佳い年を迎えましょう。

(上島博 ; httf@m4.kcn.ne.jp)

〈編集委員〉

深谷和子 (長) ・ 上島博 ・ 湯浅俊夫 ・ 清文枝 ・ 土田雄一 ・ 大高志芳 ・ 吉野真弓 ・ 細江久美子

〈「風の便り」 2022年12月号目次〉

今月の軽井沢 雲場池	榎本太麻子・細江久美子
今月の詩 「あのときかもしれない」長田弘	ゆあさとしお
実践報告1 こども食堂実践報告	長野貴子
実践報告2 体感からの学び「ビビっと！足利いろどり物語」	成澤布美子
子ども研究ノート 小林一茶「父ありてあけぼの見たし青田原」を読む	市原潤
会員談話室	
自己紹介	清水彩子・鈴木勲
近況報告	榎本太麻子
句会 むさしの	安田勝彦・市原潤・上島博
	編集後記 (上島博)